

企画展「湖北のソウルミュージック シャギリ」

長浜曳山祭をはじめ、湖北地域一帯の民俗行事で演奏されるお囃子は「シャギリ」と呼ばれ、各地で郷土色豊かな音色を響かせています。本展示では、長浜曳山祭のシャギリの過去から現在への変遷、そして、湖北地域の祭りや芸能で演奏される独自のシャギリを、実際に使用される道具などから紹介しています。また、滋賀県立大学が製作したシャギリが演奏される場所である曳山の亭（ちん）の模型や、大学の調査で見つかった囃子屋台の図面も展示しています。

湖北各地の民俗芸能は、担い手の減少で継続的な開催が難しくなっていますが、そんな中であって現在も息づく多様なシャギリ文化を感じていただければ幸いです。

記

展覧会名 企画展「湖北のソウルミュージック シャギリ」

開催期間 平成24年9月3日（月）～9月28日（金）＊期間中無休

会場 曳山博物館（長浜市元浜町14-8）

主な展示資料 別紙のとおり

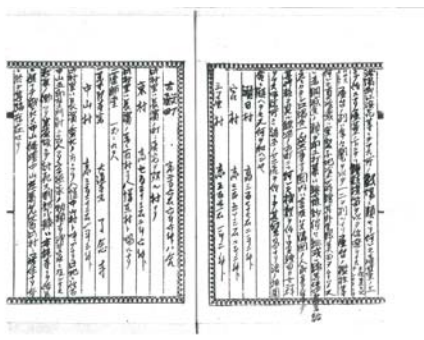
開館時間 9時～17時（入館16時30分）

料金 金 大人600円、小中学生300円 ＊長浜市・米原市の小中学生は無料

【主な展示資料】

淡海国木間攷（おうみのくにこまさらえ）（滋賀県皇典講究所蔵本の転写本の写し）

（原）国立国会図書館蔵



淡海国木間攷は、寛政4年（1792）に書かれた彦根領内6郡（神崎・愛知・犬上・坂田・浅井・伊香）の村々や神社・仏閣を記した地誌。長浜曳山祭における囃子（シャギリ）の初出は、この地誌であるとされ、坂田郡八幡ノ庄の祭礼式記の中に記されている。

下余呉太鼓踊りで使用する道具類および衣装類

下余呉自治会蔵



下余呉の太鼓踊りは、長浜市余呉町下余呉で8月20日前後の日曜日に、野神祭で奉納される民俗芸能である。大太鼓、小太鼓、鉦に加えて横笛と歌、拍子を取るタンバリンなどで構成され、地元下余呉の小中学生が分担する。直径約1メートルの大太鼓を中央に据え、その周囲を小太鼓を胸につけた踊り子と鉦打ちが回りながら踊り、その横で浴衣や法被を着た少年少女たちがお囃子や歌を歌い、タンバリンなどを叩く。踊り子は、シャグマと呼ばれる鳥の羽で作った独特のかぶり物に浴衣・緋色のカルサン、草鞋履きという装束で踊る。

太鼓踊りは、雨乞いの結果、雨乞いが叶った返礼として奉納されたのが始まりといわれるが、下余呉の太鼓踊りは、伝承によれば明治時代、東本願寺の本堂・御影堂再建で北国街道を通じて資材が運ばれた際の慰労のために踊られたのが始まりとされ、以後三度の中断期間を経て現在に至っている。

旧落合村大工組文書 囃子屋台図

滋賀県立大学図書情報センター蔵

江戸時代後期 縦37.5cm×横52.0cm



この文書は長浜市落合（旧びわ町）の大工組が所蔵していたものである。この文書群には湖北の寺社の建築時の図面や、見積書、出勤した大工の人名・日数の書上などが大量に含まれているが、大半は文化～天保期のものであり、年代を欠くこの資料も近世後期のものとみられる。現在のシャギリ屋台は棟の方向（車の進行方向）に平行に太鼓を設置し、屋台に人が乗り込んでたたく形であるが、図面のものは垂直に置かれており、静止した状態で横から太鼓を叩いたものとみられ、オコナイ行事などで大太鼓を打ったりすることはよくあるものの、実際にこういった祭礼行事において使用されたものかを判別することはできない。

丹生茶わん祭で使用する道具類

丹生茶わん祭保存会蔵



茶わん祭りは、長浜市余呉町上丹生の丹生神社の例祭（4月3日）に原則として3年に1回行われ、茶碗で組んだ3台の山車を中心に稚児による神事の舞い、若者の花傘踊り、神輿の渡御などが奉獻される。しかし、近年の人手不足等の影響により祭礼が5月の連休中に改変され、実施も不定期となっている。

その由来は、丹生神社の近くに末遠という場所があり、昔は良質の陶土を産し、そこ住んでいた陶工が神社に報恩感謝のため、毎年陶器を奉納したのが始まりだといわれている。この祭りがいつ頃から始められたかは定かではないが、古文書等によれば文禄年間（1592～1596）以前から行われていたと考えられている。巡行では、神輿の渡御に続いて永宝山、壽保山、丹保山の三基の山車が曳行される。この山車は、素朴な木製の曳山で、曳幕と綴錦の見送りをつけ、2～3ヶ月もの月日をかけて飾りを作り上げる。これらの作品は、歌舞伎や物語から芸題を取り、その場面を人形と陶器でうまく組み合わせ、絶妙なバランスで積み上げられる。祭ばやしは、丹生独特の曳山ばやし、祇園囃子、新車ばやし、神楽ばやしがある。渡御道中は、長刀振りを先頭に、十二の役、笛、棒振り、小太鼓、鼓、鉦、ささらすり、大太鼓と続き、さながら時代絵巻の様相を呈する。

心酔亭用留（しんすいていようどめ）

長浜市長浜城歴史博物館蔵

江戸時代後期 縦24.0cm×横17.4cm



本書は、長浜金屋町に居住した寺子屋師匠・沢田五平が、江戸時代後期の文化・文政期の町政資料を写し取ったものである。この中には、いくつかの祭礼関係の記事が見られる。文化元年（1804）長浜町の町年寄が彦根藩に提出した願書が記載され、この願書の前半は、彦根藩に対して祭礼における儉約と時間厳守を確認しており、その中に「囃子方に付、遠方の者雇い申さず、所（当地）にて相勤め申すべきこと」と囃子方をよそから雇ってはいけないという記載があり、山組以外から囃子方を雇っていたことがわかる。後半は、彦根藩に対して今まで通りの祭礼挙行の許可を要請している。

亭の模型

滋賀県立大学作製

縦 約114.0cm×横 約185.0cm×高さ 約180.0cm

亭（ちん）とは、曳山の2階部分のことで、シャギリを行なう場所である。外観は神輿や社殿あるいは楼閣になぞらえた形をとり、寸法的には舞台・楽屋に比べてより縮小した小建築として作られている。この模型の作製にあたっては、実際に長浜曳山祭で使用されている常磐山の亭の内部を実測・撮影し、本物の亭の大きさと内部の様子を再現している。

[展示資料]

資料名	数量	所蔵者
淡海国木間攷（転写本の写し）	1 枚	（原） 国立国会図書館蔵
山太鼓	1 張	丹生茶わん祭保存会蔵
平太鼓	1 張	丹生茶わん祭保存会蔵
鉦	2 口	丹生茶わん祭保存会蔵
道笛	8 本	丹生茶わん祭保存会蔵
山笛	10 本	丹生茶わん祭保存会蔵
棒振り	1 本	丹生茶わん祭保存会蔵
小太鼓	1 張	丹生茶わん祭保存会蔵
大太鼓	1 張	丹生茶わん祭保存会蔵
ささら	1 本	丹生茶わん祭保存会蔵
鼓	1 張	丹生茶わん祭保存会蔵
花傘	1 本	丹生茶わん祭保存会蔵
大太鼓	1 張	下余呉自治会蔵
小太鼓	1 張	下余呉自治会蔵
鉦	1 口	下余呉自治会蔵
横笛	1 本	下余呉自治会蔵
タンバリン	1 個	下余呉自治会蔵
カスタネット	1 個	下余呉自治会蔵
シャグマ	1 頭	下余呉自治会蔵
カルサン	1 着	下余呉自治会蔵
鉢巻	1 本	下余呉自治会蔵
浴衣	1 着	下余呉自治会蔵
草鞋	1 足	下余呉自治会蔵
旧落合村大工組文書 囃子屋台図	1 枚	滋賀県立大学図書情報センター蔵
心酔亭用留	1 冊	長浜市長浜城歴史博物館蔵
亭の模型	1 点	滋賀県立大学作製
太鼓	2 張	長浜曳山祭囃子保存会蔵

鉦	1 口	長浜曳山祭囃子保存会蔵
篠笛	1 本	長浜曳山祭囃子保存会蔵
篠笛	1 本	個人蔵
楽譜	1 冊	個人蔵
篠笛	1 8 本	個人蔵
計	6 7 点	